

漁協女性部で育む漁業の担い手

広田湾漁業協同組合女性部米崎支部
支部長 大和田 三代子

1. 地域の概要

私たちの住む岩手県陸前高田市は、県内の太平洋岸の最南端に位置しており県内では比較的温暖な気候で沿岸漁業が盛んな地域である。

市の北側には信仰の山である氷上山が聳え、毎年たくさんのサケが遡上する気仙川の清流が市中心部を流れて広田湾に注いでいる。

市の総面積は 231.94 km²で、その約 7割を森林が占めている。

人口は 2万人弱で、市内で行われる約 900年の歴史をもつ「けんかセタ」や熱気あふれる「全国太鼓フェスティバル」がよく知られている。



図1 岩手県陸前高田市の位置

平成 23年 3月 11日に発生した東日本大震災津波は陸前高田市に甚大な被害を及ぼし、私たちの住む米崎地区にも 16mの高さの津波が押し寄せた。

2. 漁業の概要

広田湾漁業協同組合は平成 16年に市内の 5つの漁協が合併し、現在の組合員数は正准合わせて 1,467人で、ワカメ、コンブ、カキ、ホタテ、ホヤ、エゾイシカゲカイの養殖業や、アワビ、ウニなどの採介藻漁業が主に営まれている。

平成 28年度の広田湾漁協の養殖生産額は約 12億円弱、採介藻は約 1億円強となっている。

私たちの米崎地区は、広田湾漁協の中でも貝類養殖が盛んで、養殖と採介藻を合わせた生産額のうち、およそ 7割をかき養殖が占めている。

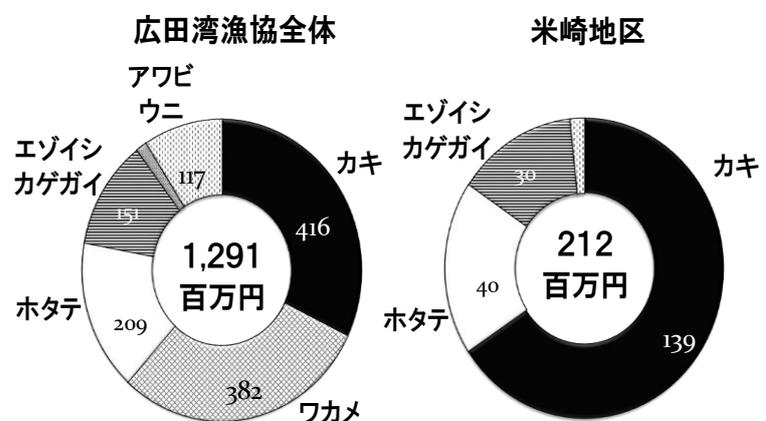


図2 平成 28年度の生産金額(養殖業と採介藻漁業)

3. 女性部の組織と運営

私たちが所属する広田湾漁協女性部は、平成16年の漁協合併に伴って設立された。

それまで旧漁協に4つの女性部があったが、それらは漁協女性部の中の支部として存続した。各支部には支部長がおり、全ての支部長は本部の部長や副部長を兼務する。

現在、広田湾漁協女性部には858人の部員がおり、そのうち私たちの米崎支部は29人と支部の中では最も小さい支部である。

これまでの主な活動は「海岸清掃」、「廃油を利用した石けんづくり」、「EM菌による水質浄化」、「かき養殖体験学習」などで、小さな支部ではあるがさまざまな活動に取り組んできた。

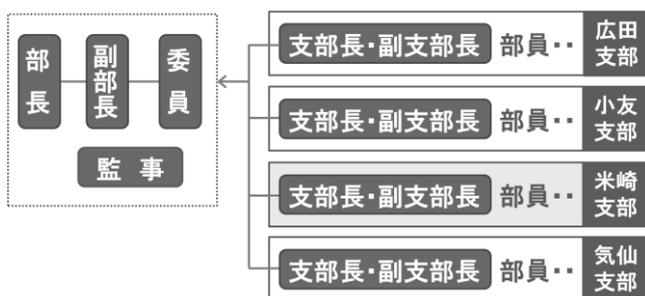


図3 広田湾漁協女性部の組織



図4 海岸清掃

4. 実践活動取組課題選定の動機

平成9年から地元中学校の依頼により、女性部員による地元中学生の「かき養殖体験学習」の受け入れを開始した。

当初は「子供たちに地域の宝(資源)を知ってもらいたい」、「都会に行って地域の宝(資源)を自慢してもらいたい」との気持ちで活動していたが、平成23年3月11日に発生した東日本大震災を契機に「若い担い手の確保に繋がりたい」という気持ちが強まってきた。

これは幸いにも米崎地区は震災後も組合員の減少はほとんどみられなかったが、組合員の高齢化はそのまま、

将来の担い手不足に不安を募らせていたからである。

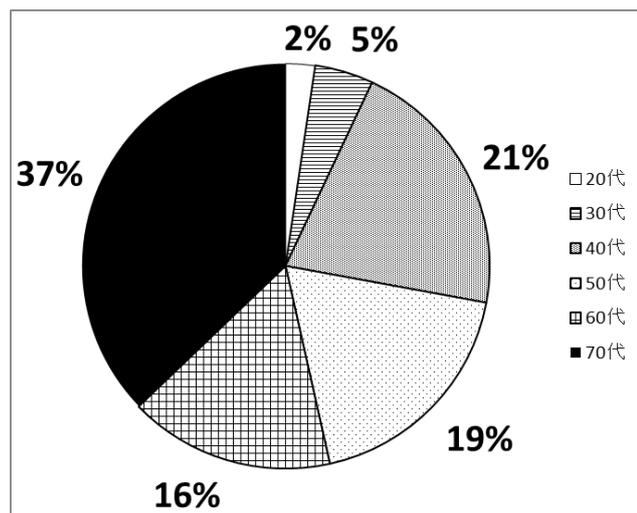


図5 米崎地区組合員の年齢構成

震災のため全ての女性部活動が停止に追い込まれてしまったものの、このような不安からこの「かき養殖体験学習」だけは震災のあった年も休まずに続けている。

5. 実践活動の状況及び成果

(1) 活動状況

「かき養殖体験学習」は実際のかき養殖サイクルと同じ2年という長い歳月をかけて行っている。これは、子供たちにかきが出来るまでの年月をリアルタイムで実感してもらいたいことと、体験がうわべだけになってしまうことを避けたいとの思いから自然にこうなったものである。この2年間で子供たちは

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年生	海に下げて管理		間引き・挟み込み作業		海に下げて管理							
2年生	海に下げて管理				温湯駆除作業		海に下げて管理			収穫作業		

図6 かき養殖体験学習の流れ

実際の養殖と同じ作業を3種類体験する。

この他にも養殖施設のいかだが老朽化した時には新しくいかだを作り直す作業もある。震災直後は全てのいかだが消失してしまったため、新しくいかだから作り直すところから始めた。

最初の作業は1年生の6月ごろに「間引き・挟み込み作業」から始まる。「間引き作業」とはかき種の成長を促すために余分かき種を盤から落とす作業で、私たち女性部員は「どのようなかき種をどれくらいの数を残せば良いのか」を実演指導する。もう一つの「挟み込み作業」とはそれまで密集した状態に置かれていたかき種の盤を適度な間隔をあけて養殖ロープに挟み込む作業で、この時は「どのような向きにどれくらいの間隔をあけて養殖ロープの隙間に挟むのか」を子供たちに教え込む。挟み込み作業は意外に力が要る作業なので、子供たちも必死になって作業を行う。



図7 間引き作業



図8 挟み込み作業

養殖ロープに挟み込んだかき種は沖にある中学校専用のいかだへ吊り下げる。この時にそれぞれの養殖ロープには自分のかきが分かるように目印をつける。

1年生での作業はひとまずここで終了し、次の作業がある翌年の8月ごろまでかきの成長を見守る。

2年生で最初に行う作業は「湯温(おんとう)駆除作業」と呼ばれている。「湯温駆除作業」とは生きたかきをお湯の中に浸けることで、かきに付着した海藻や他の貝を除去すると同時に、出荷時のかきの身を良くするために行うものである。

この「湯温駆除作業」は岩手県から始まった方法と言われており、今では他県でも用いられている。

この作業で子供たちは1年間で大きく育ったかきに感激し、一方では海藻などの雑物がびっしり付いたロープを見て驚く。子供たちは養殖ロープの上げ下げの機械操作なども体験する。



図9 湯温駆除作業

2年近くにわたる体験学習は2年生の2月ごろに行う「収穫作業」をもって終了する。「収穫作業」は文字通り自分たちが育てたかきをいかだから持ってきて、かきを1個ずつにばらし洗浄し、かきを商品として出荷するまでにもっていくもの。

米崎地区では殻付以外にむき身を出荷するので、かきの身を殻から取り外す「むき身作業」も体験する。最初はうまく取り出せなかった子供も女性部員から手順を丁寧に教わり、最後にはほとんどの子供がうまくできるようになる。子供たちにはこの作業で収穫の喜びを味わってもらいたいと私たちは一番に願っている。

作業体験が終了すると、収穫の喜びだけではなく、子供たちは蒸しがきや女性部員特製かき汁を食べて自分たちの舌で味わう。中学校ではこの「収穫作業」のことを「収穫祭」と呼んでいて、子供たちはこの日が来るのを心待ちにしているそうである。



図 10 収穫作業

(2) 成果

「かき養殖体験学習」を平成9年に開始してから平成29年までの21年間で、およそ1,000人の子供たちに「かき養殖」を教えてきた。女性部員が主体となって養殖体験を受け入れているのは全国的にもまれなケースではないかと思っている。

「かき養殖」を体験した子供たちからは「初めて船に乗りました。将来、海に関係する仕事をしたい」、「将来、漁師もいいなと思った」、「養殖業をやってみたい」、「祖父が海の仕事をしているので今度手伝ってみようと思う」、「仕事の喜びと物を作り育てる喜びを知りました」などの感想が多く寄せられている。

実際に「かき養殖」を体験した子供たちの中から3人(20代2人、30代1人)が漁業に就業し、「かき養殖」を行っている。

これまでの体験人数からすれば3人という人数は少なく感じるかも知れないが、米崎地区の養殖業者は全員で19人しかいないため3人の若者が就業した意味は数字以上に大きい。3人の若者はいずれも漁家子弟で、一度は会社等に就職したものの戻ってきてくれた。彼らの話を聞くと、「自分の家の漁船にクラスメートを乗せた時にすごく誇らしかった



図 11 就業した若者3人

た」ことなどを覚えており、漁業という職業にプラスの印象を与えていることは間違いなく、この体験の必要性をあらためて認識した。

6. 波及効果

かきをこれまで食べられなかった子供がこの体験を通じてかきを食べられるようになったり、台風が接近すると養殖しているかきの事を心配するようになったり、海をきれいにするために家庭排水などについて考えてくれるようになったりするなど、担い手を確保したいという目的以外にも「魚食普及」、「漁業への理解」、「環境保全」などの面でこの体験学習が役に立っていることが分かっている。

7. 今後の課題や計画と問題点

「かき養殖体験学習」を始めた頃は地元中学校1学年の人数は40人程度であったが、平成25年に3つの中学校が統合したため現在では70人程度に増加している。

一方、女性部員は減少し高齢化しているため、今後もこの「かき養殖体験学習」を是非継続していきたいが不安な面もある。統合した中学校の学区は米崎支部の他に広田湾漁協女性部2支所が含まれているため、他の女性部支所などの協力なども得ながらなんとか継続していきたいと思う。

また、震災後に米崎支部で再開している活動は「かき養殖体験学習」だけなので、震災以前のように他の活動も徐々に再開できるようにしていきたいと考えている。